

## 「1、2 歳児と造形活動を楽しんでみる」



金城学院大学 現代子ども教育学科  
教授 野村 和弘

### 1. 親子そろっての美術との関わりの必要性

私は保育者・教員養成大学で教鞭を執るとともに、作家活動も続けており、作品展を行う時には、作品に触れて楽しめるようにしている。特に展覧会のテーマが子ども向けの場合は、子どもたちが親しめるように工夫をするのだが、子どもたちがそれぞれの感じ方や捉え方で私の彫刻作品を楽しんでいる姿を見ると作家冥利に尽きる思いである。〈図1〉のノルウェー人の男児は、魔法にかけられてカエルになってしまった王子様を助けようとキスをしてくれた。その子なりに作品と対話して、作品への思いを自由に表現できることは、欧米人



▲図1「筆者の石彫作品にキスをする男児」

らしいと感じられ、日本に比べて幼い頃から芸術に触れさせる機会が多いことが起因しているのでは、と思わせるできごとであった。わが国でも展覧会の招待券を配布して鑑賞教育を促そうとしているが、大学生たちに「小さい頃、招待券を活用したことがある？」と投げかけても、首を横に振る学生が多い

のが現状である。幼い子どもだけで美術展に行くことは難しく、招待券を自身が活用したこともなく一緒に楽しむ術を知らない親である大人の意識も問題の一つといえ、幼い頃から親子で芸術に触れることの楽しさや大切さを知る機会を促すことが必要であると、あらためて感じさせられるのであった。

## 2. 美術作品(石彫のヒツジ)に触れる体験を試みる

金城学院大学には0～2歳児の子どもとその保護者が利用できる「KIDSセンター」という子育て支援施設があり、毎日、たくさんの親子が人と人とのつながりを楽しみに訪れている。私もイベント開催時に落ち葉や木の実を素材とした「ピザやさんごっこ」の造形遊びを企画したことから、同施設での造形遊びを通じた親子との触れ合いも増えていった。これを活かし、1、2歳児の親子に、通常はギャラリーにあるものと考えられている美術作品に触れ、そこから造形遊びを楽しんでもらったら、芸術に対する興味や意識の変化が親子の中に自然に培われていくのではと考え、「KIDS美術作品に触れようイベント みて・さわって・つくってみよう！」を展開することとなった。

この鑑賞と造形遊びを合わせた活動では、〈図2〉のように、まず筆者が制作したヒツジの石彫作品を自由に観て、触れることで、親子による初めての美術作品鑑賞体験を行った。展覧会では触れてはいけないと考えていた作品に直に触れることで、「ヒツジさんかわいいね！」や「ツルツルしてるね！」などそれぞれが感じた石彫作品の形や素材の発見を楽しんでもらった。保護者もわが子が自由に触ったり、乗ったりして美術作品を楽しむ様子を、普段見られない子どもの成長として実感していたようで、美術作品を鑑賞することが特別なことではなく、子どもたちの操を育む身近なものとして捉えられる新しい発見の体験となったようだ。



▲図2「石彫作品に触れて楽しむ2歳女児」

## 2. 造形遊び(自分だけのヒツジをおしゃれにする)の体験をしてみる

ゆったりと石彫のヒツジと接した後は、「自分だけのヒツジさんをおしゃれにしていく造形遊び」を親子で楽しむ活動につなげた。子どもには、段ボールと和紙で制作し、乗ることのできる「ヒツジさん」を一人ひとりに託し、自分のヒツジさんを色づけしていく「絵の具を使ったスタンプ遊び」を心ゆくまで楽しめるように企画した。



▲図3「制作の説明を真剣にきく子どもたち」



▲図4「スタンプ遊びを楽しむ1歳男児」



▲図5「造形遊びを楽しむ親子たち」

筆者と補助大学生が、自分だけのヒツジさんに普段はできない「絵の具を自由に扱う遊びのワクワク感」を説明すると、〈図3〉のように微動だにせず立ち、真剣に喰い入るように見つめ、キラキラした視線で制作への喜びと期待感を示してくれた。最初はどの子どもも親に促されながら真っ白なヒツジに恐る恐るスタンプで色づけをしていたが、自分で色を選び、制約なく色づけしていく楽しさに気づきはじめると、〈図4〉〈図5〉のように意欲的にスタンプを重ねたり、ヒツジの表面で色を混ぜ合わせたり、普段できない絵の具遊びを心ゆくまで満喫していた。普段おとなしい2歳女兒の親は、わが子が手が汚れることも気にせずスタンプ遊びに熱中し、自分がもらったヒツジさんを大切に扱っている姿を見て、作品鑑賞から造形遊びまでの一連の活動に、母親なりの意味を見出し、今後も小さい頃から美術作品に触れさせる機会をつくって親子で楽しんできたいと感想も述べてくれた。





▲図6「おしゃれに着彩されたヒツジたち」



▲図7「教材として準備されたヒツジたち」



▲図8「作品鑑賞のための会場設定」

子どもが感じたまま思ったままにスタンプ遊びを楽しんだ結果、〈図7〉の教材として準備された真っ白なヒツジたちはそれぞれの思いが表現された「おしゃれしたカラフルなヒツジさんたち」に大変身を遂げた〈図6〉。帰り際、大事そうに自分のヒツジを抱える子どもたちの顔は、自分で命を吹き込んだ満足感と達成感に誇らしげなものであった。

このイベントが告知された当初、保護者たちは「美術作品を鑑賞するとはどういうことなのか?」「小さい子に作品鑑賞はできるのだろうか?」と半信半疑のままの参加であったと思われる。しかし、石彫作品に触れ、形のおもしろさや花崗岩自体の素材の特徴を親子で発見し、子どもが喜んで一連の活動に参加している姿を見て、保護者たちは鑑賞活動から表現活動に展開していけることの驚きを実感するとともに、幼い頃から芸術に触れる活動の魅力についても感じ取ってもらえたのではないかと、親子のにこやかな顔を見てひそかに手応えを感じつつ、今後も、幼い頃から親子で芸術に触れることの楽しさや大切さを知る機会をつかって、1, 2歳の子どもたちと一緒に造形遊びを楽しんでいきたいと次の企画を練るのであった。